

## 追歌五首

高橋なゐ

『健康の恩恵にあづかる事の薄かつた私は休學を止むなくせしめられたり勉強も控へればならなかつたりしたが併其爲に一度も失望はしなかつたのみならず何かしら輝かしい或物が前途に私を待つてゐてくれる様な氣がして其處に辿りつく迄は歩き續けてゐる我身であるかの様にも思つてゐた。そして或意味からは病氣それ自身さへも私には感謝であつた。

『先輩や友人中にはいくらも勉強もせられ善き地位幸福なる境遇のもとに世に出て居らるる方も多いのに自ら好んで娑婆さは縁の遠い天文を擇び名を賣る事には最大の迂回をしてゐると思つてゐた自分の仕事が却つて意外にも一番に速に世界的に名を知つて貰ふための近道であつたさいふのも大きな皮肉である。思へばすべての事は私の今日の爲に準備をしてゐてくれたものではなかつたらうか。』  
これは慧星發見後の佐々木氏が同氏のために催された山本理學士邸の祝賀會席上に於て、ものせられた述懐談の一節であつたと記憶致します。

感激に滿ち感謝に溢れた氏の當夜の輝ける面持が未だ鮮に我目に

は残つてゐるのにそれも悲しい思ひ出の一つまで數へればならなくなつた今を恨まずに居られませうか。

曙光を つたばかりの金剛石よ。！眞の天稟の光體は今後日を遠ふて増し加へらるる事さ我も人も待望して居つたものを。さりさはあまりに慌しい御生涯ではなかつたでせうか。私が故人と郷國を同じふして居るさいふ此小さい事實は故人の御功績に對する個人としての私の喜ま誇さを幾倍かにしてくれました。しかも今は同じ理由のもとに氏の長逝に對する歎きを何層倍かにさせられて居ります。

岩手縣は原、後藤、齋藤(實)、など二三政界の立物を出した事を誇つてゐますけれども此天才的青年佐々木哲夫氏が學界に捧げた御功績こそはより世界的でありより永久的に記念せらるる事柄ではありますまいか。

可惜しきいくその春をよみ棄ててなごてや君の風は逝きけん  
朝顔の花のうつつ身はかなくも眞晝を待たで散り給ひけり  
消ませしは君がうつつ身遺ししは永久のみ命ちこそ經ん屋  
おのづから稀有のかがやき世に映けて玉さくだけし人ぞかなしき  
これかつて運命つたなくみちのくにみ山ごもりし黄金の君

(京都にて——春雨の日)